

2016年2月7日

くらし塾 きんゆう塾  
連載エッセイ「経済学者がくらしをあばく」

松島 齊  
東京大学大学院経済学研究科教授

## 第4回（最終回）

「幸福」  
よりよいくらしと経済学

## ベンサムのみイラ

ロンドン市内に University College of London (UCL) という名門大学がある。校内のホール通路には「みイラ」が展示されている。享年 1832 年哲人ジェレミー・ベンサムの「自己標本 (オート・アイコン)」がそれだ。ベンサムご本人の遺言にしたがって、みイラは教授会にもご出席されているとのこと。老害もここまでくればあつぱれ。写真は、私がベンサムに初めてお会いした際の記念すべき一枚。

ベンサムの頭部だけは蠟でできている。悪ガキ学生がベンサムの本物の骸骨でサッカーして損傷したから作り物に換えたなどと、どなたかにお聞きしたが、真偽は定かでない。まあ、もうどうでもいい。

こんなベンサムには有名なキャッチフレーズがある。それは「最大多数の最大幸福」だ。ひとりひとりが幸せになれば、それは社会の福祉向上にとって一番好ましいことだから、そうなるような行為や政策をしましょう。なんとも無邪気な倫理観を主張された方だ。しかし、ベンサムは、この主張を大真面目に突き詰めていって、晩年には「パノプティコン」と呼ばれる刑務所の構想にいたった。

## 監視なき監視

人は自分の意思では必ずしも上手に幸福を実現できない、不器用な存在だ。子供、病人、犯罪者にいたっては、とりわけそうに違いない。ならば、国家が個人に干渉して

そのくらしぶりを正さないといけない。これをパターンナリズム(家長温情主義)という。しかし、個別にいちいち干渉していたのではあまりにコストがかかる。

そこで、ベンサムは一望監視システム、つまり、パノプティコンという名の監獄を考案して、国家の意向に従順にふるまう個人を生産する仕組みを発明した。建物は円形で、大勢の囚人を収容できる。囚人には独房が用意されている。独房は円形の壁にぐるりと配置されている。円の中央には監視部屋の塔が設置されている。独房のドアは、監視部屋に向かって開かれている。こうして、常に全員を監視できる態勢がととのう。

ただし、ちょっとした光の入り方の工夫によって、囚人からは監視人がみえなくなっている。囚人は、姿の見えない監視人にいつも監視されている気分になる。だから、国家の意向に、いつでも従順でいえないといけない。

そのうち意向に沿うことが習慣になる。さらには、習慣は社会規範、つまり倫理的に正しい、と考えるようになる。規範に背くと、国家のみならず、社会の構成員からも非難されると思うようになる。自分もまた、他人が規範に背けば咎めたくなる。こうして、囚人は更生され、晴れて娑婆に戻れる。

パノプティコンでは、監視人ひとりで一度に大勢を更生できる。監視人は、こっそり遊びに出かけても、囚人にはばれないのだからヘッチャラ。囚人に活動の自由を十分与えておいても問題なし。強制の弱い、「ソフトな」パターンナリズムで十分効果ありなのだ。

パノプティコンが最良かどうかは別として、刑務所を、罰を与える場所としてだけでなく、囚人を社会復帰できるように更生する仕組みとするのには、賛成だ。実は、私の先祖にあたる明治の事業家、金原明善は、更生保護事業を日本で最初に始めたひとりだ。それまでは、刑期を終えても、厳しい「村八分」のために、犯罪を繰り返すしかなく、拳句は自殺してしまうそう。しかし、日本には更生保護という考えがあまり根付かず、現在、事業所は質量ともに不足していると聞く。残念な話だ。

## 高度福祉国家

パノプティコンは、国家が、最小限の強制によって、国民を規律正しい行動に導くための装置だ。ならば、なにも刑務所に限ることはない。学校、病院、職場、あらゆる「公共の場」すべてに「パノプティコン・パラダイム」はあてはまる。

気付いてみれば、現代は、監視機能のついた携帯通信の普及や、町中に監視カメラが設置されているなど、まるでパノプティコンのような「監視なき監視社会」だ。20

世紀フランスの哲学者ミッシェル・フーコーによれば、パノプティコン・パラダイムとは、社会の隅々に張り巡らされる、高度福祉国家を実現させるための一大プログラム、なんだそうだ。

## 幸福を測る

では、国家の意向に沿う幸福の実現とは、どのようなものなのか。つまり、ベンサムという「幸福」とは一体何なのか？残念ながら、その答えは、よくわからない、である。ベンサムは、みんなの幸福を比較したり足しあわせたりすることができると考えていたようだ。しかし、どこにそんな測定基準があるというのか。

20世紀終わりごろ、一部の脳科学者の間で、脳活動を画像化するハイテク装置「fMRI」を使えば、幸福度の客観的基準がいずれは見つかるはずだと、大騒ぎしたことがあった。技術がいくら進歩したって、幸福の客観的基準など見つかるはずもなかるうに。

奇妙な結果をもたらす心理実験を紹介しておこう。幸福度の基準をなんとか説得的に決められたとしよう。この基準に照らして、もともと幸福度の低い人と高い人がいたとしよう。そして、前者は宝くじに大当たりし、後者は大けがをした。ならば、二人の間で、幸福度は、もちろん大逆転だ。しかし、しばらくすると、まだ傷もいえないうちに、宝くじの賞金もほとんど使っていないうちに、二人はもとの幸福度に戻ってしまった。これでは、けが人のほうが金持ちより幸福ということになり、どうも合点がいなくなる。

幸福を測ることに意味がないわけではない。しかし、幸福を測ることは難しいし、そもそも幸福とは何かについて、我々にはコンセンサスがない。しかも、幸福がかなり不適切に定義されていても、みんなそれになかなか気付こうとはしない。

## 選択の科学

では、経済学は、幸福をどのようにとらえているか。経済学は、別名「選択の科学」と呼ばれている。経済学は、人々がよりよい選択をするにはどうしたらいいかを分析する。よりよい選択ができればより幸せになれると考えるのなら、経済学は幸福を追求する学問、とってよかろう。

こんな経済学の重要な特徴は、あなたにとってよりよい選択と、私にとってよりよい選択とを比べて、どちらがより重要か、といった、個人間で比較したり、足したりするための測定基準を、あらかじめ想定していない点にある。所得分配の公正さ、望ま

しい倫理の在り方などを考えていくと、いずれ個人間で比較することが必要になってくる。こんな場合に備えて、経済学は、どんな個人間の比較基準を想定しても、分け隔てなく分析できるように、うまく設えられている学問なのだ。

しかし、実際の経済人は、正しい選択をうっかり間違えたり、正しい選択ができない状況に追い込まれていたりする。よって、パノプティコンのような、ソフトなパターンリズムが、経済活動の随所で必要になる。

## ナッジ

たとえば、健康管理に気を付けなければならないのに、高カロリーの惣菜と低カロリーの惣菜が売られていると、どうしても高カロリーのものを買ってしまいがちだ。こんな時、低カロリーの惣菜を目のつきやすい棚においておけば、高カロリーの惣菜に気付きながらも、正しく低カロリーのものを購入するように、消費者を誘導できる。

このようなちょっとした工夫は、消費者の選択のメニューを限定したり、消費者を強制したりはしない。ちょっと肩を一押しされるだけで、消費者は、よりよい選択へうまくコントロールされるのだ。このような工夫のことを、最近の経済学者は「ナッジ (nudge, 軽く肩をつくこと)」と呼んでいる。ナッジは、ベンサム流のソフトなパターンリズムと、実質的に同じことである。ベンサムのパノプティコンは、現代経済学にもしっかり息づいているのだ。

では、あなたは、こんなカロリー問題が、上述したようなナッジによって解決されることを、本当に望んでいるのか。本当は、この惣菜は高カロリーだという情報を教えてもらうだけで、あとは自分自身の力だけで解決したい、と思ってるんじゃないだろうか。

このような質問をすると、少なからざる人が、ナッジを好まない、と答えるそう。どんなにソフトであっても、パターンリズムからできる限り逃れていたい。他人から干渉されず、自律的（自立的）でありたい。こんな風に願っているのだ。

## 自律的個人

パノプティコンの主である国家が意図する福祉理念は、自明なものでも、きちんと基礎付けられてもいない。だから、国家は、過去の経験から科学者、専門家、有識者の意見にいたるまで、様々な媒体を利用することによって、脆弱な理念を裏書することに余念がない。こうして、パノプティコンは、国家の意向に即するも、根拠のあいまいな、社会規範を生成する装置と化す。

パノプティコンから逃れたい、自律的でありたいとする人は、社会規範に照らして、よくない行ないだ、などと他者から非難され、押しつぶされそうになる。だから、高度福祉国家と自律的個人は、手を取り合うことなく、絶えず緊張関係に置かれる。

例えば、今年東大を卒業する「私」は、ITベンチャーに就職したい。しかし、家族は、とある大手企業に「普通に」就職しろ、と反対する。大手に普通に就職すれば、家族から称賛されることになる。結局、優秀な東大生である私は屈服し、就職初年度からコピー取りにいそむことになる。なんてむなしい。

福祉、福祉は大いに結構。だけど、つまらない倫理感に押しつぶされるのは御免こうむりたい。だから、私は、一市民として、そして経済学者として、幸福の実現とは、自律的であり続けたいとするエンドレス・ファイト、と定義したいのだが、みなさんはいかが？



私とベンサム